

れに今こんなところでお目にかかれるとは思わなかった”。

それはチャイコフスキーの交響曲第6番“悲愴”であった。私たちはそれに聴きいった。病的なまでの感情の鋭どさ、短音階の効果的な使用、旋律の豊かさと管弦楽法の精妙さは、このシンフォニーに何かそくそくとして人に迫るような気分を生み出させる。“いつ聞いても悲愴はいいなあ。実はぼくはこれについて深い思い出があるのだ”。

彼は輸送船に乗せられるとき、行李の中に絵の道具一式とともにこの“悲愴”のアルバムを一冊しりばせてきたのである。そしていよいよ明日はジャワ上陸作戦という前夜、輸送船の食堂の一隅でそれをゆっくり覗いたのであった。“明日の戦いでは死ぬかもしれない。しかしせめてその前にもう一度、自分の生命である芸術の世界に沈潜したかったからだ”と彼はいった。予想通り、翌日の上陸戦は激烈をきわめ、彼の乗船桜丸はオランダの魚雷艇に撃沈された。彼は重油の漂う海を泳いで辛うじて助かったが、レコードは勿論ジャワ海の底深くに消えてしまったのである。

私はこの話を異常な感動を以て聞いた。昔の教養のある武士は、よく戦いの前にかぶとに香をたきこめたり、えびらに花をさしたり、あるいは歌を作ってひそかな感慨を托したものだが、これはまさにそれにも似た心である。死の世界の入口に立たされたとき、彼の支えとなったのは、ただ教養・芸術を愛する若い心だけであった。私はそれ以来一層A大尉が好きになったのである。

彼にはジャワで愛した混血人の女性がいた。いずれ日本へ帰ったら結婚するのだといていた。その女性には私も会ったことがある。“乱暴者ばかりだといひふらされてきた日本の将校の中にこんな人がいたのには本当にびっくりしました”と彼女はいった。しかし運命は残酷である。A大尉はジャワに在任中、3カ月ほどオランダ軍の捕虜をつれてチモール島へ工事に派遣された経歴があったばかりに、戦犯として告発された。自分が助かりたいため、彼に不利な証言をした部下の軍曹を恨むこともなく、無実の罪を一身に負って彼はジャカルタで刑死したのである。

私にはなぜかこうしたゆかしい、いわば“文武の道”に秀でた日本人が、年ごとに少なくなっていくような気がして残念でたまらないのである。

## 大 学 と 地 域 社 会

有 末 武 夫

私の勤務先である群馬大学教育学部が、このたび前橋市の中心部に近い日吉町から、北部の荒牧町へ移転をした。群馬という地名は、古く牧場に放たれた馬のむらがる所から出たといわれるが、利根川の左岸、国道17号線沿いの荒牧の地も、かつてはそのような土地柄であったのであろう。広々とした環

境は冬のからっ風をまともに受けることを除けば、研究や教育の場として申し分のないように思われたが、移転を契機として紛争が起こり、そして長期にわたるストライキや封鎖の末、やっと移転は、実施にまでこぎつけたのである。

紛争の最中、地理の一学生から、「学部の移転を本質的に考えてみたい、それには地域社会における大学の役割を把握し、それに基づいて移転の意義や可否を結論づけたい」というような相談があり、よい機会だから一緒に考えてみようということになった。学生の期待は「師範学校以来、数十年の伝統をもつ教育学部だから、日吉地区との結合が強く、その結合を断ち切って移転するのは、影響が大きく、移転反対の根拠が得られるかも知れない」ということになったように推測された。しかしそのようなデータを科学的に得ようとするのは意外に困難で、手のほどこしようがなかったらしい。そこで相談の結果、地域というものを日本全体、東日本、関東、東京との関係圏、群馬県、前橋市、日吉町というように階層的に考え、それぞれに対して教育学部がどのような関連があるかを考えることになった。

広い地域との関連については、卒業生の就職先、入学者の出身地・入学金や授業料の先行・諸経費の出所とその経路その他の調査から知ることができ、さらにその特色を明瞭にするために前橋市内にある医学部や、桐生市にある工学部と比較してみようということになった。前橋市との関連については大学に出入する商人や建設業者の居住地、および職員や学生の居住地の分布のうち前橋市内の占める比率を調べ、日吉町地区については戸別の聞き取り調査により、各戸と大学との直接的つながりを調べてみようということになった。私としては、このような調査により大学と地域社会との関係が具体的に明らかになり、大きな成果が期待されたので、大学の会計、庶務や学生課に照会したり、聞き取りの項目やアンケートの内容について検討をしたりして一人で張り切っていた。

しかしその後、何の音沙汰もないので、しびれを切らして聞いてみると、「あれはやめました。だって大学とその周囲とは何の関係もないですよ」ということだった。がっかりして前に相談した調査項目をながめていると、大学と地域社会との関係は、すべて大学がそこにできたために生じた関係であって、大学がそこに存在しなければならぬというような結合関係は何もないような気がするようになった。果たしてそれでよいのだろうか。このことは大学のあり方の根本問題にもつながるものではなからうか。

## 都 市 の 膨 張 と 気 候

荒 川 秀 俊

私は、ここ2年ほど、お茶の水女子大学の地学の講師（非常勤）をしている。渡辺光さんから「教養の先生は大学者がしなければいけないんだ。メートルを挙げて、放談の限りをつくすところに値打ちが